

黄葉よ舞へよ

出づる息入る息待たぬこの冬に黄葉よ舞へよ吾にひと吹き

紀

街騒まちざわいに物売りの声混じりいてやがて今年も暮れてゆくかな

茉莉花

物売りの声微かなる路地の奥年の瀬間近き佃島かな

弁慶

薄墨しぐに時雨しぐるる余呉うみの湖暮れて遙かとなりぬ過ぎし日の憶もひ

紀

『時雨の記』 われに薦めしかの人も幼子抱く母となりけり

弁慶

しぐるるや路傍の石を想いたり吾一は今をいかに生きむと

蘇生

生きるとはかく歩むこと物言はぬ君車椅子にて教へ給ひき

紀

神の手に依りて花々草々を描くは詩人星野富弘

茉莉花

野の花の咲き乱れたる故郷の丘に登りし十五の春よ

弁慶

乱れ髪風になびかせひた走る野の火となりて空に消えゆけ

紀

乱れ髪掻き上ぐる時するしぐさ今なお若き君の片鱗

弁慶

ダイヤモンドダストの朝の思い出はしばれて白き彼奴の耳だ

蘇生

地を覆ふま白き霜のしんと更けゆく夜に亡きひとぞ想ふ

紀

武蔵野の恋ヶ窪にも冬来たる白き額と長き黒髪

弁慶

その胸を微かに揺らせ時を待つ白鷄しろとりのごと祈る暁闇あかとき

紀

あかときの優しき会話咲く花のふくらむ紅のけふのきらめき

真奈

紅の匂うがごとき海棠の花咲く寺の暁の鐘

弁慶

鎮魂の歌地に満つるこの夕べ薔薇散りてなほ花ぞ昂ぶる

紀

水色の冬空をゆく白い雲 今日とは三度目の君の命日

たまこ

君が好きだった林檎でありますズボンで拭いてガブリと噛んだ

海斗

齒形など真白きままの林檎なり君の若さの何と眩しき

茉莉花

もぎ取りて素手で磨きし紅玉をガブリと噛んだあれが青春

蘇生

受け皿の熱き紅茶を飲み干せば革命を説く君のまなざし

紀

革命を経て豊かなる国々になりたるためし無きがごとくに

弁慶

立ちて寝る君の流離ふ夜明けまへ蜜と乳の地何処にかある

紀

蜜も乳も神の恵にあらずして奮闘努力の結果ならずや

弁慶

神々の愛するその身如何ならむ路傍に咲ける花弁なき花

紀

振り向けば朝のひかりの吾亦紅ころざし持てと風に歌へる

真奈

吾亦紅すすきかるかや寂しきと詠いし人の歌集とりだし

寂

草も木も実りて次を託すなり人は寂しきことと歌うが

蘇生

ゆずりはの季節となりて若き等に希望託しつ逝きたきものを

茉莉花

たまゆらの現身生きる虹と修羅告げたきもののあまり重きに

真奈

未枯の曠野に懸かる時雨虹いつ果つるらむひとり行く道

紀

時雨止みて空に架かる冬の虹かなたに雪の富士の山見ゆ

弁慶

忙しき師走の昼の階段を一気に駆けて屋上に月

ぼばな

家の外寒々とした冬の月寝屋の幼子今夢の途中

弁慶

冬ざれの小庭見下ろす窓辺にて拳句の春を練りてをさめり

蘇生

歌仙巻く見事に詠みし発句から拳句に至る名句秀吟

弁慶

この年の移りを知るは一枚の残り日数ふ古暦かな

蘇生

街はいまメルヘンのなか梢まで光まとひて聖樹きらめく

真奈

その往昔聖母の汲みし井戸の底きらめく空の星棲まひけり

丹仙

ベルリンの奇しきその夜の体験をともし友の遺作まぶしき

蘇生

なきひとの忘れ形見やクリスマス・イヴの灯ともし君がふみ読む

丹仙

クリスマスの天に栄光地に平和賛歌地球をめぐりいるらん

千種

冬日影引き寄せてあるレクイエム先遣隊のけふ発ちてゆきたる

真奈

雪つぶて投げてたくまし少年よ今日は誰が為銃持て走る

やんま

与え来し武器は積りて銃口は天を仰いで唾する如くに

蘇生

なにほどのことやあらむとけふもまた正しき者のクリスマスとや

海月

枅のうへ燈火をともし深夜ミサ義人はなしと読みあげにけり

丹仙

仲通り行き交う人にミレナリオ冬青空に淡く光りぬ

蘇生

ポラリスはどこのかと見上ぐれど恋のドラマのようにはいかず

茉莉花

海底の千尋の深みに湧く清水人知らずとも辛きわが恋

千種

秘すほどに想い募れば曼陀羅の夜明けの夢となりし惑乱

茉莉花

林檎の香に目覚めれば雪 明け方の夢にあなたが丸嚙りせし

たまこ

鐘鳴りてカムパネルラの空はるか星のざわわと焼芋の香と

海月

ジヨバンニの我に与へし小宇宙林檎の中を汽車走り行く

丹仙

たまきはる沈黙しじまの中の妹よ欲りせるみぞれさあ受け給へ

海斗

一生をあかるくせよとこの白いさいごのたべもの我に頼みし

真奈

新宿の展望塔より丹沢の屏風の上に富士はま白に

千種

茜さす劫初の雲の海連ね蒼き冬富士立ちにけるかも

丹仙

波待ちのサーファー浮かぶ蒼海に真白き富士の偉大なるかな

蘇生

富士ヶ嶺へ降り積む雪のしんと荒ぶる風に舞ひにけるかも

海斗

病床で雪の深さを訊ねしはなべて詩となる心持つ人

茉莉花

かつてかくも美しかった日本語をおぼつかなくも辿り詠むかな

真奈

麗しき言の葉をもつ日の本の歌詠む習い永遠にあれかし

弁慶

弟よ雪は消えたぞ飛鳥山ことだま込めた桜来るのだ

海月

もういくつくしやみをすれば新しき年が来るかと風邪の床にて

ぼぼな

抽出しに胃薬・頭痛薬・風邪薬職場の戦士だった六〇年代

真奈

二日目の朝の拘置所歯磨きのほかに誰かがチョコ差入れし

丹仙

群がれる子に交はれず隅に居る子に差し出せるチョコレートかな

海斗

配給のザラメ貰いてかるめ焼き作りつ大人はアメリカさんと呼ぶ

茉莉花

南平台三泊四日のお泊まりでアメリカさんのスピーチ聴いた

海月

渋谷なる南平台や桜ヶ丘鶯谷はわれ住し街

弁慶

大年の用な尽してあはいをば終の荒らに香をきくかな

蘇生

月隠りの人皆忙しそのなかに今し匂ひの花詠むを聴く

丹仙

歌詠みの中に交じりて去年今年迎える朝の光まぶしく

弁慶

年用意すませし厨明日待つをしずもりて聴く春の羽音

寂

孫たちに古希を祝わる元朝に生きたることを実感す今

蘇生

桃李七たび^{もゝすもゝ}帰る新玉の年を迎へて賑はひにけり

丹仙

桃李七たびめぐる花の香にむせびてうれし歌を詠むわれ

弁慶

新玉や犬一猫二人間二桃李の下を往けるとこまで

海月

新玉の春の初めの風海を静かに照らす有明の月

弁慶

紅白を横目に見つつ初膳の支度終えればあらたまの年

茉莉花

この春は壁消え失せて十五年業かや未だ戦火絶えなし

蘇生

一日中子供ら捜すボスニアの昨日はありし虹の架橋

丹仙

石塊を投げて鉄弾貫かる菓子は食べたか新年なんだ

海月

此処彼処爆弾破裂イラク国隣イランは大地震かな

弁慶

初空の高きに鳥は遊べども一目散に銀の飛行機

ぼぼな

烈々と夕日に染まる初富士の高きを西へ機翼光りて

蘇生

初夢を見るべき時に寝付かれず戯曲の筋書き浮かんで消えた

海斗

梅が枝に紅点々と咲きのぼり年祝ぐさまに春は立ちけり

蘇生

白梅の花咲き初めし伊豆の国熱海の町の初日の出かな

弁慶

初夢は久方ぶりの平泳ぎ春をかぎつつ空を流れつ

海月

真青なる空美しき江戸の春罅われぬこと祈る民草

真奈

初釣の岩礁透けて魚眼には列なす竿がよく見えたげな

蘇生

透きとほる空に列なす加賀鳶よ鯉吹き流せ竿の先にて

丹仙

出初めとて四日になりて一年のすでに過ぎてぞ百分の一

蘇生

寒気団箱根の山を越えたるやわが小庭にも初霜の跡

弁慶

公園の芝生広場にピカチュウやハム太郎風あげる歓声

千種

あけおめでことよろてふ嬌声に思春期の風乱れ舞ゐたり

海月

桃李和歌連作 百首歌集

第五二〇一首より五三〇〇首迄

平成一五年一二月九日より平成一六年一月四日